

# 出雲大社, 佐香神社と酒造所との関係

中沢 萌

## I はじめに

酒は元来神聖なもので、酒造りは神事であった。それは出雲神話に登場する「八岐大蛇(やまたのおろち)伝説」や「出雲風土記」に神聖なものとして酒が登場することからも伺うことができる。

「八岐大蛇伝説」とは、村の娘たちを食らう八岐大蛇を、スサノヲが酒で酔わせて退治するという内容である。ここで登場する酒は八やしおりの醞さけ酒といい、いったん熟成したもろみを搾って濾過し、その酒でさらに仕込むという作業を繰り返した酒である。したがって、非常に高度な技術を要すると言われている。

次に「出雲風土記」では、酒に関する地名説話として、出雲市小境町に鎮座する佐香神社について書かれている。ここでは、風土記の佐香郷の郷名由来を、「佐香の河内に百八十神等集ももやそかみたちい坐まして、御厨建みくりやて給ひて、酒醸あさせ給ひき。即ち百八十日さかみづきして解散あけ坐しき。故、佐香と云ふ」としている。つまり、この地の河に囲まれた地域に大変多くの神が集まれ、酒を醸造する小屋を建てて酒を造らせた。そして、ずいぶんと長い期間、毎日さかみづき(酒浸り)になって、解散された。したがって、この地を「さかみづき」のサカから佐香と呼ぶようになった、というのである。(速水, 1987)

さて、ここで紹介した佐香神社を含め、出雲地域には酒造免許を持った神社が2社ある。出雲大社と佐香神社である。これは酒造税法が制定された明治29年以降、全国的にもかなり稀なことであり、そのため酒と神社に関する研究はこれまで数多く行われてきた。例えば、加藤(1979)は出雲風土記による地名話から、佐香神社の祭神である久斯之神くしのかみを酒の神と明確に位

置つけた上で、濁酒祭りとの関わりを詳細に考察した。(加藤, 1979.「濁酒を造る神社」)また、速水(1987)は神話の「出雲」と酒造りについて、加藤と同様に記紀や風土記を考察し、古代の酒と現存する濁酒の関係について言及している。さらに、現在も続く佐香神社の神事「どぶろく祭り」と地名説話から、サカの名がついた土地が出雲地方の酒の中心地であったとし、出雲杜氏の出生とも関連づけて説明している。(速水, 1987.「出雲神話と酒造り」)堀江(2012)は、日本酒の歴史を中心に、これに深く関連する中国大陸と朝鮮半島の酒造史にも言及している。また、中国・朝鮮の酒と、出雲大社で古伝新嘗祭に用いられる酒の仕込み配合を比較し、前述の八やしおりのさけ醞酒をはじめとする出雲地域に伝わる酒のルーツも推論している。(堀江, 2012.『日本酒の来た道歴史から見た日本酒製造法の変遷』)

このように、神社における酒造が現代に残る出雲地域であるが、実際に普段人々が口にする酒は神社で造られた酒ではなく、酒造所で造られた酒である。伝統を維持する神社と酒造技法の改良を進めてきた酒造所。現在、これらは個別に酒造りを行っているのか、あるいは酒造過程において何らかの関係があるのか。こうした酒造所と神社との関係についてはこれまで十分な調査が行われておらず、不明確な部分が多い。そこで、本稿では現在出雲市に存在する酒造所と神社との間に何か関係があるか、あるとすればどのような関係があるのかを明らかにする。

## II 調査地域の概要

出雲市は島根県の東部に位置し(図1)、北部は国引き神話で知られる島根半島、中央部は

出雲平野，南部は中国山地で構成されている（図 2）。出雲平野は，中国山地に源を発する斐伊川と神戸川の二大河川により形成された沖積平野で，斐伊川は平野の中央部を東進して宍道湖に注ぎ，神戸川は西進して日本海に注いでいる。日本海に面する島根半島の北及び西岸は，リアス式海岸が展開しており，海，山，平野，川，湖と多彩な地勢を有している。

また出雲市は東西約 30 k m，南北約 39 k m の範囲に広がり，面積は 624.13 K m<sup>2</sup>（平成 24 年現在）で全県面積の 9.3% を占めている。

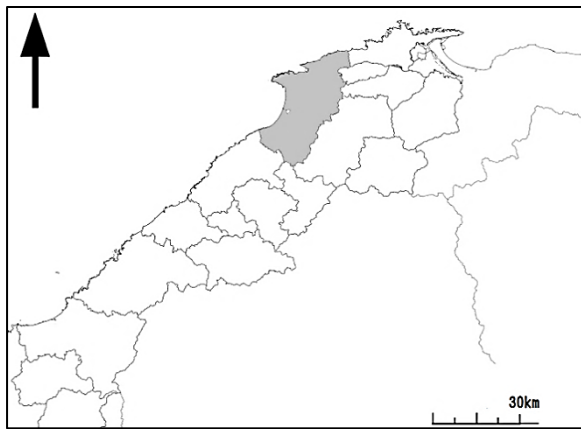


図 1 出雲市の位置

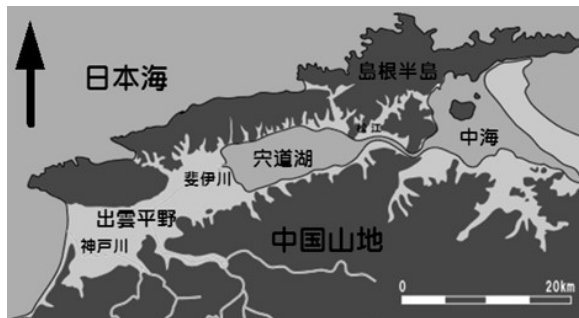


図 2 出雲市の地形

出雲地域（旧出雲国），日本海を挟んで中国大陸に面しており，古代から黒潮（対馬海流）に乗って大陸から様々な文化，技術が伝えられてきた。水稲稲作文化も大陸から伝わり，日本酒造りの源流も農耕文化とともに渡来したとされている。（堀江，2012）

出雲地域には 5 つの酒造所が存在する。旭日酒造，板倉酒造，酒持田本店，富士酒造，古川酒造である。今回は，調査協力の得られた旭日酒

造，酒持田本店，古川酒造の 3 つの酒造所（図 3）に焦点を当て，出雲大社と佐香神社との関わり方，その違いを明らかにする。

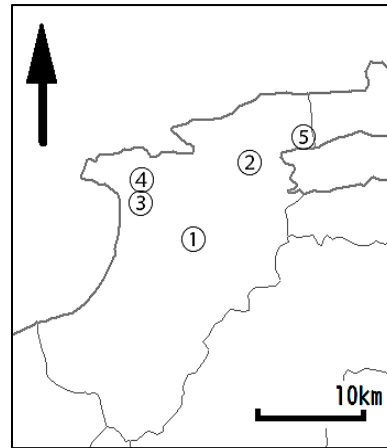


図 3 酒造所と神社の位置関係

- ①旭日酒蔵 ②酒持田本店 ③古川酒造
- ④出雲大社 ⑤佐香神社

### III 調査方法

本稿では，酒造所（旭日酒造，酒持田本店，古川酒造）に直接出向いての聞き取り調査と，新聞や各酒造所から頂いた参考資料などによる文献調査を行った。調査期間は 2012 年 9 月 24~26 日の 3 日間である。また，各酒造所によって神社との関わり方に差異があり，一貫した回答が得られないと考え，今回は神社への聞き取り調査は行っていない。各酒造所への聞き取り調査の質問項目は以下の通りである。

表 1 各酒造場への質問項目

Q1：創業・立地の由来
Q2：昔から伝わる酒種や製法
Q3：出雲大社・佐香神社に酒を奉納しているか。
Q4：奉納が始まったのはいつからか。
Q5：どのように奉納しているか。
Q6：佐香神社の濁酒祭りにはどう関わっているのか。
Q7：奉納することの意味（利益目的/伝統）

## IV 出雲地域の酒造所と神社

### IV-1 酒造所の概要

**古川酒造**：創業は天保11(1840)年。出雲市大社町に立地している。寛文7(1667)年の出雲大社の御造営時に、先祖が宮大工の一員として携わったと伝えられる。その後は代々神職だったが、天保11年に酒造業に転じ、以来6代になる。先祖が出雲大社の神職で、また御神酒を用達することから、店の入り口にしめ縄を備えている(写真1)。また、神前に供えられる酒を奉納しているため、店には瓶子<sup>へいじ</sup>という酒を入れてつぐのに用いる器が数多く並んでいる(写真2)。



写真1 古川酒造の入り口にあるしめ縄



写真2 古川酒造に並ぶ瓶子

**旭日酒造**：創業は明治2(1869)年。佐藤家6代目の嘉兵衛が酒造業を始めた。出雲市今市町に立地している。代表的な銘柄は「十字旭日」。これは明治40年に大正天皇の山陰地方巡行の折りに献上された酒が「天下一品の美酒なり」と賞賛され「旭日」の揮毫<sup>きごう</sup>を受けたことに始まる。近年、古酒の分野にも力を注いでいる。

**酒持田本店**：創業は明治10(1877)年。出雲市平田町にある雲州平田木綿街道沿いに立地

している。持田家の三代栄太郎が興した「持田栄太郎商店」が造り酒屋の始まり。「広く一般に嗜好される酒」を目標に、理論と実験に最も適合する方式を研究・応用している。長男邦蔵(四代)を大蔵省直営の醸造研究所に学ばせ、新式速醸方式を導入した。

### IV-2 神社における酒造の概要

**出雲大社**：出雲大社は出雲市大社町にある。出雲大社の酒造り発祥の詳細は平安時代の火災で記録が残っていないため、定かではない(2012.1.8 朝日新聞)。しかし、平成21年に出雲平野では紀元前1世紀～紀元2世紀にかけての朝鮮半島の土器が数多く出土し、当時朝鮮半島との交流が盛んであったことがわかった。したがって、出雲大社の酒はこれらの影響を受けた酒だと考えられている(堀江, 2012)。

古事記・日本書紀によれば、出雲大社の祭神大国主命が酒の神とされており、祭事の際は出雲大社で造ったお酒が神に供えられる。そもそも出雲大社は毎日が御日供<sup>みひつぐ</sup>という祭礼であり、出雲大社で造られたお酒が日々神前に供えられている。中でも、毎年11月23日にある「古伝新嘗祭」はもっとも大きな祭礼である。ここでは「一夜酒」という太古から伝わる酒が供えられる。この祭儀はその年の秋の収穫を祝い、翌年の豊穰を祈願して、その年に獲れた米で造った酒を人々に振る舞う風習が今に伝わったものと言われている。一夜酒は、祭儀後に一般の人にも振る舞われる。

このような出雲大社で造られる御神酒は「御供所<sup>みくうじょ</sup>」とよばれる出雲大社内の建物で造られる。神酒を造るのも1つの祭事であり、祭儀課が司っている。

**佐香神社**：佐香神社は出雲市小境町にある。前述の通り、佐香神社は出雲国風土記の地名説話として登場するため、酒造りのメッカであったと言われている。したがって、サカという地名が、佐加から佐香、古佐香井、古酒恵、濃酒井

と変遷し、今日の小境という全く酒とは無関係の地名となっている。(速水, 1987)

佐香神社の祭神、久斯之神の出所は明らかではないが、加藤(1987)は「久斯=くすり=さけの意、したがって明らかに酒の神」だとしている。当社の酒造りは毎年10月13日に行われる「どぶろく祭り」のために行われる(図3)。この奉納神事は14世紀中期ころから伝承されている由緒ある行事であり(加藤,1987)、神前に酒桶を奉納し、酒造関係者一同がその年の酒造安全を祈願するものである。出雲大社と同様、祭儀の後には、一般の人にも濁酒が振る舞われる。



図4 どぶろく祭りのポスター

## V 考察

### V-1 酒造所と神社との関係

聞き取り調査の結果から、調査対象となっている酒造所と神社の間には、立地、酒の名前、酒の奉納、神事への参加、商業的関わり、伝統的関わり、醸造過程の点から関係があることが明らかとなった(表2)。

表2 酒造所と神社との関係の有無

	古川酒造	酒持田酒造	旭日酒造
出雲大社	◎	○	○
佐香神社	○	○	○

(◎: 大変有 ○: 有 ×: 無)

表3は、立地、酒の名前、酒の奉納、神事への参加、商業的関わり、伝統的関わり、醸造過程での関わり等の7つの項目ごとに聞き取り調査の結果を表している。「立地」は酒造所の立地由来、および神社との位置関係である。また「商業的」とは、神社と酒造所の間で商業利益につながる関わりがあるかどうかを示し、「伝統的」とは神社と酒造との関わりが、先祖代々伝わってきたものであるかどうかを示したものである。

#### V-1 (1) 出雲大社と酒造所との関わり

各酒造所とも奉納と神事を中心として出雲大社と伝統的な関わりがあることがわかった(表3)。奉納に関しては、どの酒造所も家内安全、酒造安全を祈願し、感謝の意をこめて奉納する。しかし、奉納が始まった由来は酒造所によって様々である(表4)。

古川酒造は、前述の通り先祖が造酒司さけのつかさという神職に就いていた。造酒司さけのつかさは、出雲大社で酒造りをする役職であったが、それが今の古川酒造のある場所に独立し、酒造業に転じた。そのため、出雲大社の御用達として御神酒を奉納するようになったのだという。その奉納の起源は不明であるが、古川酒造の伝統として、代々受け継がれてきた。

酒持田本店は、初代が神道を信仰していたことが、酒の奉納の由来だという。したがって、奉納は明治10(1877)年頃から始まったといえる。

旭日酒造に関しては、出雲大社への奉納の起源や由来は不明であった。しかし、他の酒造所と同様、旭日酒造の伝統として、先祖代々酒を奉納してきた。

表3 観点別でみた酒造所と神社との関わり方

出雲大社との関わり	立地	酒の名前	酒の奉納	神事への参加	商業的	伝統的	醸造過程
古川酒造	○	「八千矛」	○	○	○	○	×
酒持田本店	×	×	○	○	×	○	×
旭日酒造	×	×	○	○	×	○	×
佐香神社との関わり	立地	酒の名前	酒の奉納	神事への参加	商業的	伝統的	醸造過程
古川酒造	×	×	○	○	×	○	×
酒持田酒造	×	「佐香錦」 「濃酒井」	○	○	×	○	○
旭日酒造	×	「純米吟 醸佐香錦」	○	○	×	○	○

(○：有×：無)

表4 酒造場と神社との具体的な関わり

	出雲大社	佐香神社
古川酒造	<ul style="list-style-type: none"> <li>・先祖が出雲大社の宮大工、造酒司</li> <li>・御神酒を御用達</li> <li>・酒の名前「八千矛」</li> <li>・店には瓶子が並ぶ</li> <li>・12月初旬に安全祈願のため参拝</li> <li>・秋の出雲大社の神事に呼ばれる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・御神酒を奉納</li> <li>・毎月13日に参拝</li> <li>・どぶろく祭り参加</li> </ul>
酒持田本店	<ul style="list-style-type: none"> <li>・初代が神道を信仰していた</li> <li>・御神酒を奉納</li> <li>・秋の出雲大社の神事に呼ばれる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・御神酒を奉納</li> <li>・毎月13日に参拝</li> <li>・どぶろく祭り参加</li> <li>・濁酒の会で佐香神社の維持管理。</li> <li>・酒の名前「佐香錦」</li> </ul>
旭日酒造	<ul style="list-style-type: none"> <li>・御神酒を奉納</li> <li>・秋の出雲大社の神事に呼ばれる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・御神酒を奉納</li> <li>・毎月13日に参拝</li> <li>・どぶろく祭りで濁酒造りに携わる。</li> <li>・酒造シーズンが始まる前は安全祈願に参拝</li> <li>・酒の名前「純米吟醸佐香錦」</li> </ul>

また、酒持田本店と旭日酒造において、この奉納は商業利益目的でないことがわかった。旭日酒造の副社氏は、「感謝と祈りの意を込めて神様に捧げるものであって、商業的利益を目的とするものではない」と話していた。したがって、これらの酒造所にとって、酒の奉納は営利を目的としない、いわば精神文化として、代々受け継がれてきたものだと言える。一方、古川酒造は出雲大社に御神酒を用達しており、商業的な関わりがあることがわかった。これは、古川酒造に特徴的なことだといえる。

商業的なつながり以外にも「立地」と「酒の名前」における関わり方が、酒の名前に大国主命の別名「八千矛（やちほこ）」をつけている古川酒造のみ特徴的である。図2からもわかるとおり、古川酒造は出雲大社のすぐ近くに立地している。これは、造酒司が酒造業に転じたことに由来していると共に、古川酒造で造る酒が出雲大社の御用達であることとも大きく関わっていると考えられる（表3）。歴史的な背景が立地や酒の名前に反映しているといえる。

「神事への参加」とは、毎年11月に行われる「古伝新嘗祭」への参加のことを指す。出雲地域の酒造所はその祭礼に呼ばれ、神事に参加する。今回調査した3酒造所とも、神事に参加していることがわかった（表3）。

その一方で、醸造過程において出雲大社と酒



造所の間には一切の関わりがないことも明らかとなった。このことから、醸造と酒造所を招いての神事が切り離されていることがわかる。

### V-1 (2) 佐香神社と酒造場との関わり

出雲大社と同様、3酒造所で奉納と神事を中心として佐香神社と伝統的な関わりがあることがわかった(表3)。どの酒造所も奉納の起源は不明だとしているが、酒の神が祀られている佐香神社に酒を奉納する伝統は、先祖代々続いている。また、この伝統的な関わりは商業目的でないことが、3酒造所に共通している。古川酒造にとっての出雲大社のように、「御用達の品」として奉納するのではなく、どの酒造所も酒造安全と酒造所の今後の発展を祈願して奉納するのだという。立地的な関わりと商業的な関わりの有無が対応していることから、これを裏付けることができる。

3酒造所に共通する「神事への参加」とは、どぶろく祭りにおける「酒造安全祈願祭」(図4)への参加である。ここでは、出雲地域の酒造所の杜氏たちが集い、濁酒を回し飲みして酒造安全を祈願するという。また、10月13日に限らず、毎月13日にも出雲杜氏たちが佐香神社に参拝する慣わしになっている。調査した3酒造所も、毎月13日に参拝していることがわかった。この他に、旭日酒造では酒造シーズンが始まる前にも参拝する。酒の名前に関しては、酒持田本店と旭日酒造で佐香神社にちなんだ名前をつけていた(表3)。また、酒持田本店と旭日酒造は佐香神社における濁酒の醸造過程に携わっていることでも共通している。

このことから、酒持田本店と旭日酒造は佐香神社とより深い関わりがあると共に、元来、神社が独自に行っていた酒造過程に酒造所も関与するようになったことが明らかとなった。

### V-2 出雲大社と佐香神社の酒造りの違い

出雲大社も佐香神社も自社で酒造りを行う

点では共通している。また、その酒造りが秋例祭の際に行われる点、そこで造られた酒が一般の参拝者にも提供される点でも共通している

(表5)。秋例祭とは、出雲大社では古伝新嘗祭、佐香神社ではどぶろく祭りにあたる。これは、その年の収穫を祝い、その年に獲れた米を使って酒を造り、それを人々に振る舞うという新嘗祭の名残である。したがって、出雲大社でも佐香神社でも祭事後には、参拝に来た市民にも神社で造られた酒が振る舞われる。

しかし、前述の通り、酒造所との関わり方は両神社で異なることがわかった(表5)。出雲大社では、神官による神事と共に酒造りが行われ、醸造過程で酒造所との関わりを持たない。これに対し、佐香神社では毎年持ち回りで酒造所が濁酒造りを手伝っている。また、出雲大社では女性杜氏の神事への参加が認められないのに対し、佐香神社では女人禁制がない。元来、神社における酒造りは神聖な行事で、神社関係者しか酒造に携わることはない。加えて、女性の神事への参加も、その神聖さ故に認められてはいない。出雲大社においては、その伝統が厳格に守られていることが、調査の結果から明らかになった。佐香神社でも、もともとは宮司が酒造りをしてきたが、近年は地元の杜氏が醸造過程に関わり、ともに濁酒造りにあたっている。

表5 出雲大社と佐香神社の酒造りの違い

	自社で造る	酒造りの過程での酒造所との関わり	一般への提供	女性の神事への参加
出雲大社	○	×	○	×
佐香神社	○	○	○	○

各酒造所と神社との関係は伝統的なものであり、その関係を変化させつつも先祖代々受け継がれてきたものであることがわかった。このように酒の奉納や神事への参加が、何の強制力もないにも関わらず続いてきた背景には、精神的側面の他に、何かしらの要因があるはずで

表 6 神社への奉納が続いた要因

	古川酒造	酒持田本店	旭日酒造
出雲大社	出雲大社に奉納することで全国から注文が来る。		
	出雲大社の御用達		
佐香神社	出雲杜氏組合による日本酒造り技術伝承の取り組みの一環。		

ある。表 6 には、聞き取り調査から考えられる要因をまとめた。

出雲大社への酒の奉納が続いた要因、あるいは奉納を続ける利点としては、商業的なつながりがあるといえる。特に古川酒造は、出雲大社の御用達の品として御神酒を奉納しており、これは双方の需給が一致している。また、出雲大社に奉納することで、全国各地から奉納用の御神酒の注文が来ることがあるという。これは、出雲大社の御祭神である大国主命が配祀されている神社や信者が出雲大社の御神酒を買い求めるためである。この注文は、古川酒造のみならず、酒持田本店、旭日酒造にも来るそうである。したがって、「出雲大社に奉納している」事実を宣伝に用いることが商業的にプラスに働いていると言える。実際に古川酒造ではホームページ上にその旨が記載されている。

佐香神社への奉納が続いた要因としては、酒造りの技術伝承の側面があると言える。聞き取り調査と出雲杜氏組合のホームページから、「出雲杜氏組合の酒造り技術伝承の一環として醸造される酒が、どぶろく祭りで奉納される」ことがわかった。つまり、どぶろく祭りが酒造の技術伝承の取り組みの 1 つとして機能しているのである。このことは、少なくともどぶろく祭りへの参加を継続させる働きがある。したがって、どぶろく祭りへの継続的な参加が、佐香神社への奉納を継続させる要因となったと考えられる。

## VI 結論と今後の課題

本稿では、出雲地域に存在する酒造所と神社との間にはどのような関係があるのかを聞き

取り調査から明らかにした。

1. 出雲地域の酒造所と出雲大社、佐香神社との間には、奉納や神事を中心に関わりがある。
2. この関係が代々途絶えず続いた要因として、以下の 4 つが考えられる。
  - ・酒造安全、家内安全を祈願しての精神文化が根付いていること。(出雲大社・佐香神社)
  - ・出雲大社に奉納していることで生じるネームバリュー。(出雲大社)
  - ・出雲大社の御用達の品として御神酒を奉納していること。(出雲大社)
  - ・出雲杜氏組合による日本酒造り技術を伝承する取り組みの一環。(佐香神社)

今回は出雲地域の 3 つの酒造所に聞き取り調査を行い、神社との関わりを考察した。しかし、神社と酒造所との関係を正確に表すためには、より多くの酒造所に聞き取り調査を行う必要があると感じた。また、今回の調査では酒造所側からの聞き取り調査のみで、出雲大社、佐香神社への聞き取り調査を行わなかった。その結果、神事の様子や醸造過程での関わりなどについて、詳細に明らかにすることができなかったことが、反省点として挙げられる。

## VII 謝辞

本稿を作成するにあたり、調査を快諾してくださった出雲大社の関係者の方、お忙しい中お時間を割いてくださった農学博士の堀江先生、古川酒造の古川様、酒持田本店の持田様、旭日酒造の佐藤様には、心より御礼申し上げます。

## 参考文献

旭日酒造ホームページ.

<http://www.juiiasahi.co.jp>.

朝日新聞 2012.1.18

出雲市ホームページ (2013.2.10 現在).

<http://www.city.izumo.shimane.jp>.

内藤正中 1969. 『島根県の歴史県史シリーズ  
32』 山川出版社.

加藤百一 1979. 濁酒を造る神社. 日本醸造協  
會雑誌 74(4) : 222-229.

加藤百一 1982. 酒神と神社 (4). 日本醸造  
協會雑誌 77(1) : 26-29.

加藤百一 1982. 酒神と神社 (13). 日本醸造  
協會雑誌 77(12) : 889-892.

加藤百一 1987. 『日本の酒 5000 年』 技報堂出  
版社.

坂口謹一郎 1964. 『日本の酒』 岩波新書.

酒持田本店ホームページ.

<http://www.sakemochida.jp>.

佐藤吉蔵 1988. 旭日酒造. 日本醸造協会誌  
83(5) : 334.

島根県酒造組合ホームページ(2013.2.10 現在).

<http://www.shimane-sake.or.jp>.

速水保孝 1987. 出雲神話と酒造り. 本醸造協  
會雑誌 82(8) : 562-566.

古川浩 1965. 出雲大社の御供所(ゴクウシヨ).  
日本醸造協會雑誌 : 44-49.

古川酒造ホームページ(2013.2.10 現在).

<http://furukawa-brewery.com>.

堀江修二 2012. 『日本酒の来た道歴史から見  
た日本酒製造法の変遷』 今井出版.

森浩一ほか 1991. 『海と列島文化第2 巻日本  
海と出雲世界』 小学館.